
風の中から夢の中へ

椎名未来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の中から夢の中へ

【Nコード】

N2763V

【作者名】

椎名未来

【あらすじ】

第二次大戦後のもう一つの世界。

2007年、オセアニア周辺が大戦の影響でイギリスの植民地になっていた時代。オーストラリアは他地域を含めて独立を宣言、それと同時に日本では正体不明のテロ組織の犯行が相次いでいた。

テロ組織の男の子はオーストラリアと……ある女の子を助ける為に動き出す。

ネゴシエーター、自衛隊、警察庁、テロ組織メンバーの男の子、各視点で描かれる物語。

プロローグ

目をしかめながらパソコンのディスプレイを見つめる。

「うっわ……、やってらんねえ」

俺がそう、ぼーっとデスク越のテレビを見て言う。

この警察っていうのはどうにも暇で、どっちかっていうと鎮圧諸々は今のテレビに映ってる自衛隊が主。

「なので俺たちは暇なわけで」

ちらりとオフィスを見るけど、外務省出向の新人が窓際のデスクに、それに南の作戦傍受にいそしむ課員が俺含め八名。もっぱら俺はデスクワーク、

「って！」

俺がぼんやりそれらをなんとも感慨深げに見ていると、おもいきり後ろからひっぱたかれた。すぐに後ろを向くと長身にブラックのスーツにブラウスの女性が目に付く。

「高木くん、あなたちゃんとやってって言うているでしょう。何度、言ったら、わかる、の」

言葉を区切りながらしばしば遠慮なくタウンページを振り下ろしてくるのはどうしたもんか。

俺はその秀麗な顔に細いリムのメガネをつけた典型的（なんていったらどうなるだろう）美人さんに言う。

「ちゃんとやってますって真菜さん。ほら、自衛隊、今動いてる途中だし、オーストラリア連邦もイギリスもうごいてませんし。連絡待ちなんですよって！」

ふつと真菜さん、この長、警察庁情報局局长、佐々木真奈の攻撃を避けきると、ふーんと韜晦するように俺の顔をしげしげとみしてくれる。見ていて悪い気分はしないがなんとも心臓にわりいもんだ。

「まあ、いいけどね。動きはないってこと？」

「ええ」

俺はげんなりしながらP Cを操作して、近似曲線、二項の定理からくる、各国の提示連絡を表示。

「今、発生している関東地区全域のネットワーク遮断、特に米軍と英軍との連絡遮断の首謀者は港区南青山にある五十階建てビル『ビルジビル』の屋上にいると判明。現在航空自衛隊傘下の情報作戦部四課が交渉中、他警視庁よりS A T、S I Tもろもろでてますね」

そう俺のやる気のない声にまた一発脳天にかましてくれる我がボスだけでも、データとテレビをみながら後ろでまとめて結い上げる髪を触って、

「やっぱりこれって南緯五度海域緊張の煽り？」

俺がP Cを切って、そのまま両手をひろげてテレビのほうを示す。相変わらずのデータ打ち込みと傍受に忙しい室内だけでも、実際は内閣の意向が強いらしく、次長もいやいややってるといふ噂。

「むしろカーペンタリア紛争じゃないですかね。首謀者は高校生ですから」

ん？ つと首を傾げる真菜さん。おお、いい感じに幼げに見える。でもこれでも合気道八段。

「ほら、だから。二年前の自衛隊遠征派遣。日本のイージスが誤射で十隻沈没。当事者の英軍は慰霊金と謝罪だけ。国際関係悪化を嫌がった日本はそれで遺族を黙殺。その遺族ってーのが、」

「この子、ってわけか」

そういつてテレビをみる真菜さん。液晶フラットの左済みにはどこのテレビ局が映しているのだろうか、屋上に男性が一人、女の子が屋上落下防止用フェンスに座っているのが見える。というかさすが零次。

「遺族は偶然にも全員中、高生。まあ、だから納得もできるんですがね。でも、すぐに収まるでしょうよ。四課のエースの梶原零次かしわらいしですからあれ」

へえーとどうでもよさげに、いや真実どうでもいいだろうけど、

いってからバンつとタウンページを俺のデスクに放り投げる真菜さん。

「高木君の同期のね。ま、それよりも、」

そういってテレビの中心のほうを指さす。

「こっちのほうの問題なんだけど」

俺ははいはいと言って作業に戻る。PCをつけ、英軍の公式文書の偽証作成をしながらニュースの声を聞く。

『 七日、以前独立を宣言を宣言してから強行姿勢を崩さないイギリスの属州、オーストラリア他州はオーストラリア連邦共和国と名前変え、小規模なテロ活動を行っています。一九二〇年の第二次世界大戦後にイギリス属州となったミクロネシア、ポリネシア、メラネシア、オーストラリア地域は、その後も属州ながらも小規模な紛争はあり、それがいよいよ、来月の国連による国際宇宙ステーション、ICPの完成を見ての独立と各専門家が述べています。これをうけ、国連メギル事務総長は七日昼にメルボルン入りをしており、一二カ国会議の早期開催を訴える方針です。しかし、一方のNATOの首脳判断で、ソロモン諸島海域に国連平和維持軍、ISAFがNATO軍と展開する自体となっており、国連の総意と相反する形と 』

第一章 裁かれるもの 一

僕達が会ったのは偶然だった。

でも必然だったことは皆がわかっている。きっとどうしたってこうなったのだから。

そんなどうでもいいことが、偶然に偶然を重ねて、そして、絆を作ってしまったのだらうと思う。

僕達はどうしてで「あつた」のだらう。

出会ってよかった。

でも

出会ってしまった。

「ねえ、カズミはどうしたの？」

僕がぼんやりと海をみていたら向かいの席に座っているシルフィに声を掛けられたので目を移した。彼女は南欧に特有の金髪碧眼で、その整った顔を心配そうな表情にくずして目の前のアイスココアを啜っていた。

「さあ。僕もよくわからないよ。最近はよく一人でパソコンにかじりついていたからさ。今日も三号館のトレーニング実習室じゃない」

僕は興味なさそうにそういうとまた海に目を戻した。僕はこの協

力ができているというのにお互いの腹をさぐりあうようなこの行為が嫌いだった。そしてこんなことぐらいしかいえない僕自体嫌いだった。もう少しいい方って言うものがあるのだろうが、いつもつき離してしまうような言い方になる。

「……じゃあ、トモユキのステディは？」

茶化していないのがわかるよう、声はそのまま悲しげだった。僕は少し眉を潜めるだけで何も答えない。

やっぱりこういうふうにみられるのはいい気分じゃない。確かに回り公認の中だって言うことは僕だってわかっているけど、僕は十五歳なりに十五歳の意地、というか反発心がある。

しばらくして溜息をついてシルフィーに向かって、

「ユイはまた海洋研究の実地調査に同行していったとおもうよ。ウエルズリー諸島で日本の海軍の残骸が見つかったとかさ」

「あ、ニユースでやってたの？」

うん、と僕が生返事をしてオレンジジュースを啜った。

半年前の日本の自衛隊海外派遣にともなうて僕はこのリッチモンド州立大学付属高校（正確には中学校と高校をあわせたようなものだけど）に編入してきた。

お父さんは始めての海外派遣で、そのほかの友達のお父さんとかも一緒に派遣される、大規模なものだった。だから始めは渋っていたお父さんだったけど僕とお母さんを連れてこのオーストラリアまで来た。

学校はなれなかった。日本大使館にある日本学校にかよってたけど、慣れしまうと外人と同じ教室で授業をうけなきゃならなくなった。そんな僕を、いや、僕達、をしきりにかまってくれたのがシルフィーとクニツク、ジュディ、クリストの四人だった。僕達は自然とまた四人だったのでいつしか八人でいつも行動するようになった。

なんでもない中学生、なんでもない十五歳の生活、ちよっと違う生活だった。

はずだった。

二〇〇五年一〇月一七日、早朝。物凄い霧の中、イギリス軍の海軍が警戒していると、何か甲板に当たる音がした。その兵士はそちらを見ると同時にさらにヘルメットに何か当たり、その反動で持っていた小銃の引き金引いてしまった。

戦いはすぐに紙を燃やす火の様に広がり、イギリス軍、日本海上自衛隊、オーストラリア自治州クインズランド方面大隊の三すくみで交戦。結果三者とも甚大な被害がでた。自衛隊はイージス艦十隻は沈み、戦死者は三一人と戦後初めて争いで戦死者。

同時に僕達日本人の四人の父親もその中に含まれていた。

僕達は落ち込み、なぜこんなことになったのだと大人達になんども怒り、悲しんで、そして疲れた。

結果は引き金を引いた兵士に水鳥が植物の種を偶然落としてそれが原因だったとされた。

くだらない理由だった。だから僕達は疲れた。

そしてそれ以上に僕達八人は結束した。いつも以上にどうしたらこの戦争がはじまるかもしれない状況を変えられるか話あっていた。自分達のような人達を出さないために。

自分達を救うために。

この状況を変えるためには「誰かが」、必要だった。そう、皆そうだっただけだ。

いつだったか、クリストが面白そうにいった。

「僕達はレアノアのような」

よくわからなけどどうやら「集まり」って意味らしかった。そのときからしきりに八人の間でレアノアという言葉を使うようになった。

「ユイもあんなに真剣にならなくてもいいのに。どうせ僕達だけの力じゃ、解決しないさ」

シルフィーはふんつとはなを鳴らして僕に指を指して、

「あなた彼女、好きなんでしょ。だったら一緒にいくべきだわ」

僕はそんな気はない、と両手をあげていらひらさせるとシルフィーはまた陰鬱な表情に戻る。確かに好きさ。ああ、大好きさ。でもユイみたく僕は真剣になれないのも真実だった。

だって利用しているだけじゃないか。

これが恋だというなら……

「これって本当に好きって言うのかな」

「え？」

僕の日本語の独白にシルフィーが首を傾げる。僕は少し、唇を上げて、

「俺たちはレアナアだもんな。互いを心配しないわけないだろ」

そういうとお互い少し笑う。海沿いのこのカフェテラスに強い太陽の光が入ってきて、シルフィーの影を薄くする。

「それでシル、お前はなにしてんだ？」

「サボり、中」

そう意地悪そうに微笑んできた。

僕達はいつまでこうしていられるのだろう。

そして優衣と和美の二人が日本に行方を眩ましたのが半年後だった。

オーストラリアその他の地域がイギリスから独立を宣言したのがあれから一年半後だった。

渡航は制限され、緊急事態宣言が本国から発令された。

僕達は同じ地上にいて分断された。

日本へいけたのは随分後になってからのことだ。

第一章 裁かれるもの 二

僕がいつも通り公園であき時間をベンチに寝っ転がって過ごしている、すぐ横のベンチに誰かが座ってきた。

僕は一人のほうが自分の時間というものを堪能できると思ってるので、めんどくさいけど別のベンチに移動しようと体を起こそうとした、が。

「あ、うわ！」

一時間ちよい、変な格好で寝ていたので身体を起こそうとした右腕がまったく麻痺していて、情けなくも変な声を出しながらベンチの前にすっころんだ。両足が上にふられて一気に青空が視界に入ると同時に頭が地面と衝突した。

ヤバイ、誰かに……、見られてるかも。ぐあ、恥ずかしい、とっところから……。

「おい、大丈夫か？」

身体を起こそうとしたら後ろから声を掛けられた。

上下が紺のスーツにシャツは薄い黄色。この暑いのにクソマジメにネクタイをちゃんとしてるのが違和感がある。スーツの上着は左手で肩にひっかけ、口にタバコを銜えたその顔は二十代のような大学生のような、高校生と言われればそんな感じもしない、下品な冗談ばかりいって一人笑ってそうな容姿だった。

「おい、ほら」

そういって男は右手を差し出してきた。……まあここで警戒しても意味がないし。

「……どうもっす」

僕はそういって男の手を握り身体を起こす。ぱんぱんと学ランについた土を払っていると、

「あーあー、随分汚れちまったなあ。ていうか結構面白かったぜ？」

すんげえ変なこけかたしてたし。それに『うわ』、だもんな。は。俺も昔女子高生のパンチラ見ようとして同じことしたことあったよ」

それではははっ、と笑ってタバコの灰を落とす。

……………なんだろ、この人。なんか物凄い関わっちゃいけない感がばりばりしてくるのでとっとこの場から逃げたほうがいいかもしれない。僕はそれほど初対面の人との耐性がない。

「あの……………じゃあ僕はこれで……………」

そう言っただち去ろうとすると、

「ああ！ 待てよ待て。気に障ったんなら謝るよ、すまんすまん。とりあえず座ろうぜ。暑いし」

そういうと僕の了解も得ずにとっとさっきまで僕が寝ていたベンチの横のベンチにどっかりと座る。

そしてまたタバコの灰を捨てると、ぼーっと突っ立ってる僕のほうを見て言う。

少し首を傾げた。

「何してんの？ 座れよ。暑いだろうそこ」

「あ、はい」

あ。

なんか返事しちゃった。まあ、いいか。僕は流されやすいんだ。

そして僕がベンチに座ると早々に男が言った。

「しかし学校サボっちゃあんまりよくないよ。桜庭高校二年四組十八番の青山隆介君」

「……………えっ」

僕が驚いて男のほうを振り返る。男は相変わらずひひひっと、笑うとフィルターぎりぎりまで吸ったタバコをゴミ箱に投げ捨てる。

「あの、な、なんで……？」

「ん？ ああ、いや別にサボんのはいいんじゃない？ 俺も高校の頃はしょっちゅう……」

「いや、じゃなくて」

「ははっ、と男はまた笑うと、

「あんまり怒るなよ。お前牛乳飲んでるか？ カルシウムな。別になんでもない。ほれ、これ」

そう言っつて僕の膝にカード状のものを放ってくる。学生証だった。「ほらさっきお前起こした時にさ、落ちてたから」

「……………」

「なんだこの人は……。」

スリか詐欺師か、またやなにかの殺し屋か。そんな臭いまでして来る。

『そんな状況に僕はあるんだから』警戒してもいいかもしれない。僕が胡散臭そうな目で見ていることに気づいたのか、男はおやつと言う顔をした。

「ああー、そんな警戒すんなよ。別に俺はお前を誘拐だの、誰それさんに頼まれたので殺しに来ました神に祈る時間をあげましょう、なんてことするつもりねえよ。誘拐すんならお前より女子高生のほうが何ぼかいいだろうし、そっちのほうが色っぽい」

なんか言っつてることがどっかの漫画で見たような記憶があるので、意外に若いのもかもしれないただ何にも考えちゃいけないだけなのかもしれない。

「別に俺はちよつとこれからあー……、なんつーか仕事でお前と同じ高校の生徒と会いに行くからたまたま見るかけて、そんで公園だったもんだからちよつと息抜きにやすんでこうかなあってただだよ、連れに頼んで」

「連れ？」

僕がそう言っつと公園の入り口を親指で示し、僕が見るとなんかどでかい白いバンが止まっているのがみえた。あんまり距離が離れて

いないので運転席のハンドルに両腕をかけてうつ伏せで寝ているだろう女性が見て取れる。

「俺たち最近まで労働基準法クソ食らえって言う感じのすっ飛んだ仕事終わったばかりなのに、ったく、また仕事なもんだからこうやって現場に行く前におサボり中ってわけさ。お前は？」

「……俺もサボりです」

ひひひっと、男が笑うとそら見ると言った。僕も少しにやりとしてしまう。なんだかこの男性はひとなつっこい雰囲気もあいまって直ぐに人の警戒をといてしまうような空気がある。

「桜庭ってあれだろ？ 結構名門の進学校だろ？ まったくなんでこんなことばかり……」

「こんなことって？」

僕がそう言うとき男はああ、いやいやと左手を振ってなんでもないこつちの話、と言った。なんか苦い顔していたけど。男はまた新しいタバコを出すとき火をつけた。

「んでお前は何？ なんか嫌なことでもあったわけ？」

男はどうでもいいように、ゆっくりと言った。

「進学校ってわかってるならだいたい予想がつくじゃないか。勉強すよ。なんつーか嫌になって」

ふーん、と男は口から出るゆらゆらと空に昇っていく煙を目で追っている。

「あーじゃあさあ、お前みたいなのっていっぱいいるわけ？」

「僕みたいなのって？」

「だからサボるヤツ」

「……どうなんだろう。」

「友達とかはマジメなやつばかりかすから。まあいるんじゃないすか。」

男は妙に納得しているようで、ふんふんと頷いて僕の言葉を租借しているようだった。

「はせがわかずみ長谷川和美」

男は突然そう言った。知ってる名前だった。僕のクラスの女子だ。男はさっきまでのふざけたにやにや笑いをやめて真剣な顔を向けて僕に言う。

「お前そいつのこと知ってる？　これから会いに行くっていうの、そいつなんだけど」

なんだろう。本当になんならろうこの人。でも自分の素性まで知られているし、別に喋ってもいいかもしれないと思う。

そう間違っと思ってしまった。

「そりゃ　知ってますよ。同じクラスの女子です。えーと……、可愛くて、勉強にスポーツになんでもできる子の典型的な子ですよ」ふんと男は鼻を鳴らして下を見る。なんだかそんなもんは当のつくの昔に知ってるって感じだった。それとも僕の評価に不満を持ったようにも見える。

「そいつってなんか変わったこととかないわけ？」

「……？　変ったこと、すか？」

「そう」

んー……、別に何も無いけど。

「ああ、なんていうか暴力的っていうか、結構危険思想いっぱいでしたね。なんかそっち系の情報とかいろいろしってるみたいだったし」

「へえ、あーじゃあ、」

プップーっと車のクラクションの音がした。見ると例のデカイバシに乗ってる女性がいつの間にか起きていて、早くしろと催促しているみたいだった。男は、ったく、あと少しの、とか意味のわからないことを言いつつ、

「見ての通り、俺はお仕事タイムのようだよ。んじゃもう行くから」

「あ、はい。えっと、仕事頑張ってください」

男はお前はいいやつだなと笑いながら僕の頭を撫でようとして、

「っ！ 熱っ！」

下を見ると左手にタバコの灰が落ちていた。まったく何すんだよ、と男に文句を言う前に、

少し。ほんのすこし針でつついたような痛みが右腕に走ったけど、

左手のやけどでそれどころじゃなかった。

「ああ、悪い悪い。たばこ持ってたのすっかり忘れてたなあ。ところで今何時？」

「え？ あ……午後一時二十分……？」

「おー、そんな時間か。あとお前が所属してる部活は？」

「あ、え？ それって」

男を僕は必死に見ようとすると目が眩がそれを許さない。

急激な眠気と全身の倦怠感が一気に押し寄せてきた頭がふらふらと左右に揺れる感じが伝わってくる。それで限界だった。

そのまま横に傾いでベンチに寝っ転がった。いや、倒れた。

男はわざわざ僕の視界に入ってきて、言う。

「いやいや……。最近のガキは口が堅いんだな。あーんまり情報は得られなかった。まあ、元々期待はしていなかったけどな。いや、情報はなかったに等しいな長谷川の彼氏さん」

こいつ、それは……。

「宮崎の言うとおりだった。とんだ無駄骨、って俺の見間違いか。

……っーか保険なんだから見間違いって事もないか。ああ、心配すんなよ。お前はただ寝て、起きるだけだ」

……？ ……？

「じゃあな、ああ、そうそうまだ名乗ってなかったな。俺は武藤。」

情報作戦四課の室長つてのが、　　って覚えてないか」

そう言っつて男が僕の前を立ち去り、そこで意識が途切れた。

「…………ん」

僕はのっそりとベンチから身体を起こした。なんだろう。今まで何をしていたんだろう。

とても頭が重いような。全力で走って冷や汗がでて出し尽くしたような、そんな疲労感。

ベンチなんかで寝てるからだろうって感じた。今日は和美と一緒にサボって遊ぶ約束だったのにすっぱかされてここで不貞寝してた、はずだ、よな。

「あ…………、なんだろう。変な感じ」

さっきまで誰かといったような、話していたような感じもするし、でもそれは夢の中の出来事のような気もしている。ふと変なことに気がついた。

寝ていたベンチが一つ、公園寄りだったことと、左手に何か焼け跡があったことだった。

「あー、本当にサボれたらいいのになあ」
「なに言っつてんのよ」

白いバンの中で一組の男女が話している。その一人はさつき公園で話していた武藤だった。

「私の言う通りだったでしょ？　彼氏なんか当たってもウチの四課

の情報のほうがマシだつて」

「だーからサボるために行ったんじゃないか」

「……ばっかじゃないの」

武藤は大学生のような若い相貌の顔を歪めて笑い、

「いいだろうがたまには。少し休憩つてことでさ、これも保険なんだしこういう小さい積み重ねが解決に繋がんだよ」

いかにももつともらしいことをいう武藤に対してそれを聞いた女性性は相変わらず眉を顰めながら言う。

「彼に使った薬、ラインアルトカクテルの量はちゃんと守ったでしようね？　こんなくたらないことで死人でたらあんたも私もクビよ？」

「だーいじょぶだつて。お前の言うとおりやったつて。それよりこれから本当に死人出る確率が高いほうにいわせればまだマシだろ」

「……まあね」

そう言うつと二人は無言になり、大型の白色バンは料金所を通過して首都高速道路に入つていった。

第一章 裁かれるもの 三

都心に近いある一つの高層ビルの屋上、正確にはその屋上にある落下防止用のフェンスに少女が一人、絶妙なバランスで座っていた。膝にはバームトップ型のパソコンに耳にはワイヤレスイヤホンマイク。

地で茶色い綺麗な髪を両側で結んでツーサイドにしている。その髪がビル風になびき、そして少女の身体もすこしばたつく。

「うん。大丈夫だよ。こっちはうまくいってるから。もしものときは、……あ、いや、これは私の独断だからフォロワーは気が向いたらでいいよ」

少女は友達と明日どこへ行くのか、カラオケは飽きたから遠出でしようか、といった感じで、歳相応に楽しげに会話していた。実際口元は綻んでいるが、しかし目の前のパソコンのキータッチは止まらない。

「うん、うん、……わかってる。あ、ごめんちょっと待って」

そう言うとスカートのポケットからリモコンらしきものを出してパソコンのモニタを見ながら、なんの躊躇いもなくスイッチを一つ押した。

するとゴゴゴンっ、と地鳴りのような、地下鉄が傍を通り過ぎるようなくぐもった音がビル内から聞こえ、そしてだんだんと静かになっていく。

だが屋上だけは静寂だ。相変わらずのビル風に小女の長い綺麗な髪が遊ばれる。

「あ、ごめんごめん。お邪魔が入ったから消してた。うん、大丈夫。……え？ 『レアノア』は動かせないよ。うん。じゃあ、そうだね

え、また何かあったら連絡するよ、うん、またね」「
少女は本当に嬉しそうな笑みを浮かべる。

「優衣」

「しかしだなあ、こんなご時勢だつてのに俺たちが出張る理由つてのはわかるか？」

高速を近場のインターチェンジより出て、一般の幹線道路を走る白いバンの中で一見若いようだがよくみれば毎日のように続く激務のせい、目の下にはクマができて二十代半ばと誰でもわかる容姿の男が横の女性に話しかける。しかし相変わらず眠たそうな、余裕がありそうな顔は変わらない。

「なによ、急に」

女性は男のいつもとは違う口調に訝しげに眉を顰め、道路を右折する。女性は細いリムのメガネをかけた秀麗な美人の顔立ちだった。しかし来ているのが紺のパンツスーツにブラウスなため、あまり目立たない恰好になってしまっている。こだわりでもあるのか髪に花柄のガラス細工の髪留めをつけていてそこだけ際立っていた。

「別に。このままだと俺が寝ちまいそうだから」

「寝たらぶん殴るわよ」

そんなこと言っただつて、と男はリクライニングさせた助手席で両腕を頭に組みふぁーっとあくびを一発かます。

「昨日だつて家屋全壊だの、人殺しだの、そんなの警察でも消防団でも商工会議所にもまかせとけてのに……。下のほうで緊張状態だからってウチラが引つ張りまわされてさあ。テロじゃねえだろどう考えても、ったく」

「ふーん。それはご愁傷様ね。私、昨日は五時で上がって焼肉食べてたわよ」

ふんつと男は鼻を鳴らし、あくび交じりにまた言う。

「んでー……、なんでかわかるか？」

「さっきの？ 答えは自分で言ったじゃない。緊張状態が続いてるから、なんかことあることにテロだって思っちゃうんでしょ」

「まー……そうなんだがなあ」

女性がハンドルを回して公園を左折すると、目の前に天を突くような巨大なビルが見えてきた。見方によっては五十階はありそうだが、ところどころから煙が上がっているのを見ると尋常じゃない雰囲気伝わってくる。しかしバンの中の男女はそれをぼんやり見つめながら、少しもそんな緊張感の欠片もなく話し続ける。

「それもあるけど、つまりは警察だっているいろやるけど結局わからなくなつて損害が大きくなると俺たちに回しちまうのさ。『もう手に負えません。こっちはほかにも事件が抱えてんだためえら暇なら動け、税金ただでもらつてんじゃねえぞ』ってことさ。まあつまりは面倒事の押し付け合いつてわけだ」

「ふーん……。あ、だから最近空自の災害出動とか多いわけ？」

「いやいやと男はめんどくさそうに右手を振る。

「空自だけじゃない。陸自だって海自だって機動隊だつてとにかく武装して銃もつてる集団ならどこだつて緊急出動って感じなんだわ」
女性は赤信号で車を止めると思案げにちよつと考えて、

「じゃあ、昨日一緒に焼肉食べた早川に悪いことしたわね」

「なんで？」

「明日も仕事なんですよー先輩ーって言ってたから。今頃空母にでも乗って太平洋上じゃないの」

はー……、そりゃ大変だと男は全然大変そうじゃなく言う。

「でも早川は今現場いるぞ」

「え？ なんで？」

「呼ばれたんだと、よ。上に」

ふーんと女性は言うつと、

「やっぱなんかおかしいわね」

「だから俺がさっきから言うてるだろ。実際、完全のA装備で連絡のあった現場行くとなーんにもなくてな。そんなのもう十回や二十回じゃきかねえくらいある。意図的に振り回されてるって感じ、してくるだろ」

そう言うつてもう目の前の見上げるのも億劫になるぐらい高いビルの頂上を指差す。

「その原因が長谷川ちゃんってことね」

「そ。一応防御に回って中央は守ってるけどなにせ人が足らなくてそこらへんのもぐりのハツカーやらも集めてプロテクトって感じ」

「でもそれだったらあの子たいしたもんだわね。米軍との連絡完全に遮断したんだから。もう少し幕僚のジジイ共が予算降ろしてくれたらもつといいの作れるのに」

目の前にはもうビル入り口が見え、その周りを警官が野次馬やら報道陣やら車やらを近づかないように押しとどめている様子が見える。雑踏はどうでもいいが、それを押し留めている警察関係者は明らかに混乱しているのがわかった。

「まあ、その技量は買ってやってもいいな。コレ終わったらうちのスカウトするか？」

「そんなことしたら鼻フックしてあんたの首ひっこ抜くわよ」

おー怖、と男が苦笑するとサイドブレーキの後ろにあるテレビリモコンを三枚に重ねたようないかつい無線機がピーピーと鳴る。

それ聞くと男はまるでさっきとは別人のように無線機を引っつかみ口に当てた。

「武藤だ。状況は？ …… ああ、もう目の前だちゃんと全員揃ってるか？ ああそうか……」

女性のほうは、武藤の話聞きながらビルの地下駐車場に野次馬をさけて入り口から入り、そのまま同じような大型バンが止まっている集団のところに向かう。

「は？ 梶原が？ はー……、んじゃあいつになんとかしてもらおうか。ちょうど適材適所だろ。労災はおりるって言っとけ。ん？ 宮崎？ ああ、わかった」

そして横の女性、宮崎に武藤がんつ、と無線機を渡す。宮崎は何も言わずそれを取り、

「なに？ ああ、わかったって。それはそっちの分野でしょ。畑違い。もう着くから」

そう言うと早々に無線を切った。

「なんだって？」

「先輩なんとかしてくださいだつて」

あそ、と武藤はリクライニングを起こした。バンはまるで野営のテント張っているかのような集団の横に駐車し、そのまま武藤と宮崎は降りる。

「お疲れ様です」

黒服で地下だと言うのになぜかサングラスをかけている中肉中背の男が武藤に近寄ってきて言う。

「全員配置についてるか？ 準備は？」

テントの中に入りながら、さっきのぐーたら男とは見間違つかのようなしゃきつとした感じに宮崎は少しほくそ笑みながら後についていく。

「ダメですね。三十九階までが最高でそこで吹っ飛ばされました。

警察の一機の二名が死亡、五人重症です」

「ふーん、なんかゲームみたいだな、とかいったら一機の隊長にタコ殴りにされるな」

でも発言の内容はあんまりかわらないようだった。

「そんでウチの梶原はどこにいる？」

「四十一階。ちょうど先頭にいたんで爆発はさけたようですね。ラッキーだとか助けてとか言っていましたか？」

「そのまま上に行けって言っとけ」

「は？ しかし、」

「いいから」

「わかりました」

そう言うと同じような黒服は同じような集団に走ってテント内に戻って行き、野戦服をきた見れば明らかに自衛隊の隊員達が何十と設置しているコンピュータを前にわきめもふらずなにか作業しているテント内に武藤は入って言った。

武藤はそのままその一番左のテーブルで作業してるWAC（女性自衛官）に近寄っていく。隣りには宮崎がおり、なにやら指示を出しては考えていた。と武藤に目をやり、

「柿崎なんだって？」

「一機の葬式には何送ったらいいかわかりませんでしたって」

「あそ」

宮崎はそのまま考えるように右手を顎につける。服装が派手じゃない分、あまり目立たないがよくみれば美人というのが宮崎がうけている周りの評価だ。

「あ、武藤さんお疲れ様です。ちょっとこの子かなりぶつとんでますよー」

早川がパソコンのキーをたたきながら言う。四枚の液晶ディスプレイには目まぐるしくデータが入れ替わっている。

「ん？ おい、どうなってんだ今」

今度は宮崎に言う。

「どうにも長谷川ちゃん、ビル全体の警備システム乗っ取っちゃってるみたいね。あとトラップが」

「千二十一箇所あります」

早川が言葉を繋ぎ、宮崎は肩をすくめ、どうする？ と武藤を見る。

「ていうか、明らかに外に協力者いるんじゃないかねえの？ これ」

「いえ、」

早川が野戦服の帽子の下から武藤を見上げパソコンの液晶画面を叩く。

「六時間と三十八分前に第十三B 九九九プロテクトをこのビルのサーバ含む全てのネットワークで展開中です。よって外部からの干渉はあと七十九時間は不可能なので……、多分トラブルばかりは誰かがやったんでしょうけど、このサイバーテロはあの子一人でしょうね」

「おおー。ハッカーのアルバイト君たちはちゃんと働いてるようだね。感心。しかし、たしかにぶつとんでるな。まあーじゃあー外部の干渉は無理ってんならあれしかねえかな。もう」

「あれって？」

宮崎が嫌な予感がする。と言う感じで聞き返した。武藤と言う男は解決するなら駆逐艦に漁業の民間船をぶつけるような男なので嫌な予感がする。

「簡単。このビルにくる電気を『すべて』こないようにすればいい。あとは梶原におまかせってことで」

「え、ですがそれではここも使えなくなりますが」

早川の応答に武藤は手を振りながら、

「ここ、商業ビルなんだから地下に自家発電だかあるだろ？ それ拝借すればいい。もちろんあっちにいかないようにな。物理トラブルだけならあいつでも突破できるからなんとかなるだろ。ほら、決まったら動け動け！ 野郎共、まずは電力会社に送電ストップさせる。できなかつた区ごただ。あとは地下に送電線がないか確認しろ。宮元、お前は隣のビル行ってSATについて状況報告。柿崎と奈場と薄野は十階で待機して無線の中継基地を作れ」

そこまでいうとまわりの動きがさらにあわただしくなった。武藤は宮崎を見ると、にやりと笑い、

「さてと。これで米空も見直してくれるかな？」

「無理よ」

苦笑する宮崎を横目に武藤は無線機をとり、チャンネルを合わせる。

「武藤だ。梶原、今から指示を伝えるぞ。もう一回きいたらためえ

の今月の給料無しだ」

早川はその姿をみつめ、その早川の後ろで七十八時間三十二分二十一秒と刻々と時間が過ぎていく。

「だからあ、今はそこに誰もいけないっていったんだよ、は？ だから無理だつて。……そうそう、へ？ おまつ、ちよつとま、」

武藤は無線機を耳に当てた格好のまましばらく止まって、はあ、つと盛大にため息をついて苛立ち気に無線機をテントの中央に置かれていたテーブルにガツンつと置いてどっかりとパイプ椅子に座る。「その様子じゃまた梶原くんは単独つっぱしりのようね」

宮崎も少し嘆息する。

「ああ。助けるのは無理だから援護が行くまで待ってて言うのと、今度は逆にじゃあ僕一人で説得しにいけますなんていいやがつて……。あーあーこれだからキャリア上がりは嫌なんだよ。普通一課だろ。あいつみてえなのいるの。採用したの誰だよ」

「採用のハンコ押したのあんたよ」

宮崎がコーヒーの紙コップを武藤の前において自分もコーヒーを啜りながらパイプ椅子に座った。

「……そうだっけ？」

宮崎はもうそんなのどうでもいいという感じでそっぽを向くと、「でも梶原くんならなんとかしてくれる……ていうかこれで事件解決じゃないの？」

「……そうなるといいけどなあ。一応ネゴシエーターだし。今日は風呂にはいれっかなあ」

武藤がふけくさい頭をがりがり掻いた。

第一章 裁かれるもの 四

ブリッジビルから約四百メートルはなれた同じ港区内の高層ビル。四十五階と階数は少ないものの、建て増しをしている分、高さはほぼ同じだった。

その屋上に件のビルをライフルのスコープで見守る人影が一人と。その横で双眼鏡で見ているのが一人。

二人ともうつぶせになって微動にしない。

「クリスト。退路の確保は？」

スコープをのぞいている少女が横の栗色の髪を持つ白人の少年に声を掛ける。少年も同じく双眼鏡で観察したまま、

「大丈夫さ。買収した仲間がジェットヘリで来る手はずになっていくよ。もっともうち落とされなければ、の話だけだね」

そういつて少し微笑する少年の顔を少女が一瞬だけ盗み見て顔をしかめる。

「あなたの速い仕事には感謝するけど、もっと仲間は大切にすべきね」

すこし声を荒げるように言うが、少年はふん、と鼻で笑い、

「仲間……ねえ。この場合、いったいなにが仲間で何が仲間じゃないかというところから始めなくちゃならないけどさ。『レアナア』である僕らに他に仲間はない」

自分の意思を断言するような発言に少年も、少女もお互いブリッジビル屋上を監視しながら黙る。少女が持っているライフル VSR10の改造銃 は最大射程が約一〇〇〇メートルと巨大だがそれをあてるだけの技量を少女はもっていた。少女は今にも引き金

に手をかけて、屋上に入ってきたものをすぐにも撃ち殺す構え。
「『レアノア』はこんな目的のためにつくったんじゃないわ。南北の友好関係の狙いが本来の目的だったじゃない」

少女の悲しげな英語の独白に、少年はなにも答えず、ただ双眼鏡でビル内を観察しているだけだった。

ふいに少女のワイヤレスイヤホンマイクにピピッと通信受信の通知音。

『優衣、面白いのがきたわ。とりあえずいれるから、フォローよろしく。でも最悪の場合になっても手をだしちゃダメ。そっちは逃げてね』

「……………わかった」

少女は強くグリップを握る。

「これで八十三個め……………」

僕はそう一人で呟いて非常階段に仕掛けられていたパイナップル（手榴弾）のブービートラップを解除するとまた登って行く。先にこのビルに機動隊は五回の侵入を試みたが全て失敗。それも各フロアに仲間がひそんでいるのではないかと考えて階段からいったのだが二重三重に張り巡らされたトラップに大人数ではひっかかるの当然だった。というわけ。

「非常階段つてのは意外に安易だったけど……………、大当たりだったなあ……………」

ビル内に作られている非常階段ならそんなデカイトラップは仕掛けられない。通常の階段ならまだしも非常階段は「エレベータと階段に隣接しているため」そこふつとばせば自分の逃げ道もなくなるというわけ。

「……………でもこの仕掛け具合からしてまるで逃げ道なんてなくてもい

いような感じだな」

たいてい、こういった場合の犯人は自殺ってというのが考えられるけど……。

「女子高生相手じゃ、あんまりだなあ。ま、そこは僕の腕次第ってことで」

そんなくだらないことを考えているとあっさり最上階の五三階に到着。ここから通常階段から屋上にでなければならぬ。

僕は一応用心しながらドアをあけフロアにでる。確かこのフロアは社長室と秘書室、会議室くらいしかないはずだからざっと見渡すだけでフロア内を確認できた。ふむ。まあだれもないが、問題は……。

「これだよなあ……」

通常階段の前には厚さ三十センチはある防火扉が降りてしまっている。僕の専門は人間であって電子系はまったくの門外漢だ。ここに早川さんでもいたら目をランランと輝かせながらこの扉を数秒もたたずに文字通り「バラバラ」にしてしまうだろう。

「なんていったら殺されるな……」

ふうつと僕は防火扉のよこの壁に背を預けた。単純トラップなら訓練でのスキルで切り抜けられたがこういう融通の利かないものはどうにもなあ。

「しかし……」

僕は目の前の廊下、数十メートル先のドアの上にある「社長室」というプレートを見る。どうしてトップに立つ人というものは一番上、という場所に自分のオフィスをつくるのだろうか。日本人ならいざ知らず、アメリカ人だってフランス人だってそうだ。べつに受付の横の守衛室の横の部屋に作ったって、営業課の隣りに作ったって社長の業務には支障はないはずなのに。これなら今起こってるようなテロが起こったとき、在室時間さえわかれば外から狙い打ち放題だ。と、

僕の横の防火扉が勝手にゆっくりキシキシと音を立てながら上が

り始めた。僕はくだらない益体事を考えるのをやめてそれを見るとガコンッと完全に上に上がり、屋上への階段が姿を現した。

「……自分でやりましたっていつたら武藤さんも少しは大人しくなってくれるかな」

そういいながら、このフロアに出てからずっと僕監視してた監視カメラに手を振り、階段を登って屋上の扉を開けた。

「こんにちわ」

高い、女子特有のソプラノが数メートル離れているというのに僕の耳まで聞こえてきた。長谷川和美は相変わらずこちらに背をむけたまま、

「とりあえず隣りにすわりませんか？」

自分が座っている落下防止用の「フェンスの上」の隣りを示した。

第一章 裁かれるもの 五

「人を殺したいと思ったことはありませんか？ 刑事さん」

横の和美ちゃんは膝に置いたバームトップ型のパソコンに目をこらし、時折キーをたたきながら僕に問いかける。

「ずいぶんな質問だね。でも僕は刑事じゃないよ。一応自衛隊のほう」

ふーんと和美ちゃんは足をぶらぶらとさせる。数メートル先は何もない、資料によれば三九メートルの落差があるだけだ。それにしても風はなく、僕たちの会話は途切れることなく続く。

「じゃあ自衛隊のお兄さんで。で、答えは？」

「そうだね。そりゃ人間だから僕もあるけど、その質問の問題の核心は実際に実行できるかどうか、だろ？」

そういうと初めてにこつと笑う、が相変わらずパソコンに目を落としましたままだ。

「その通りだね。たいていの人はそう考える時もあるけど実行するには及ばず、それでおわっちゃうわけ」

ふー、と息をつくとき、

「じゃあ殺されると思ったことは？」

「うん？それはさすがにないな」

「私はありませんよ」

「どうして？」

「人を殺したことがあるからですよ」

「……………」

「理論的には実に簡単。実際殺してみても、『自分もだれかにこっい

うふうに殺されるんじゃないか』という無意識にうもれていた感情が出てくるんです。当事者にしかわからない当事者だけの感情。だからこそ人を一回殺してしまった人は殺しつづけなければならぬ」「……ふむ。一種の麻薬みたいなものかな？ 殺したという不安がさらに駆り立てる。でもさつきもいったように一回やったとしても絶対にそうなるとは限らない。それじゃあ殺人鬼が右往左往しちゃうよ」

ふふふつと和美ちゃんは僕の台詞のどこが可笑しかったのか少し笑って、

「それもその通り。まあこれは個人の理論なんでほつといていいです。それでは人が人を殺す理由というのは？」

「……僕はこれでも一応人を助ける立場なんだけれどね……。それはとっさに、とかつい、とかじゃない？」

「んーん。六十点だね」

「それなら単位はもらえるよ」

「そうだね。でも私は『障害』になったからこそ人は人を殺すと考えるの」

「障害……」

「そう、障害。俗っぽくいっちゃえば道にころがつてる石を蹴飛ばして逆行に落とすのと同じ。自分の人生に障害的なものが発生したらそれを排除しようとするのは自然だからと思う」

「それはまた極論だね。じゃあなんで障害になれば殺すんだい？」

「いい質問ですね。それはまたまた簡単。私が言っているのは人間関係のことでその中で生まれる殺意のことです。人間だれかと仲良くするからこそ関係が生まれるわけですが、それでは絶対的な矛盾が出るんです」

僕は自然と腕を組む。

「誰かと仲良くするということは誰かを選ぶ、ということであって、逆説、それは誰かを選ばない、ということが必ずおきるわけです。選ばれなかった人間はよほどの場面がない限り殺意は芽生えません

が、そのようになるなら、芽生えると考えるのは十分です」

喋っている和美ちゃんを僕はじっとみつめる。長い、きめ細かいそれを後ろで一つにまとめたさらさらの自然な茶色の髪。生真面目に制服を着て、資料どおりの可愛い容姿。

「ふむ。和美ちゃんの考えはわかった。でもそれでも殺人は許容できるものじゃないよ」

僕がいうと、和美ちゃんはふふっと笑う。

「私ではできません」

「おや？ はじめて意見が分かれたね」

「そうですね」

そうして初めて僕をみてにつこり笑う。さてさて……。どうしたもんか。説き伏せるのが不可能なら少々癪だけどワイルドカードをだすか……。

「もう一度いうけど殺人というものは許容できるものじゃない。色々な理由はあれど、殺されたほうはそれで終わりだ。殺したものは誰一人かまわず地獄に落ち込むべきだと思う」

少し語調を強めてみた。が

「しかし、殺したほうがそんなことを感じなかったら？ それで障害が取り払われたならどう思います？ 嬉しいと思いませんか？」

「それは違うね。僕としてはそれは、言っちゃ悪いけど人間じゃない」

そういうと和美ちゃんは不思議そうに首を傾げる。

「人間と言うのは多かれ少なかれ、感情移入できる生き物だよ。できるからこそ、かわいそうだなとか、幸せそうだな、とか僕もあなりたいとか、思うわけさ。でもコレにはデメリットがあるのはわかるよね？」

和美ちゃんは答えずに頷くだけにした。

「つまり逆の負の感情、あいつをけおとしたい、奪ってやりたい、うるさいからいなくなってほしい、そして殺したい。つまり感情移入できることは人間に生きるうえで必要であり不必要なのさ。そし

て和美ちゃん。君は許容できるって言ったよね？」

「いいました」

即答。

「それは人間として重要なそれが欠けているのさ。つまり人間じゃないっていうのはそういうこと。感情移入の正負が拮抗して自分の欲求というものを始めて抑えられる。僕は医者でもなんでもないからわからないけど、和美ちゃんがそういうなら君は正の部分が人間として欠けているんだよ」

少しひや汗がでてきた。まるで綱渡りしながら会話してるかのようだ。一歩間違えれば即落下。まあ四百メートル級の高層ビルの屋上フェンスの上に座っていても冗談にもならないけど。

ふふつと和美ちゃんはまたわらってパソコンのキーをたたく。

「それは新しい意見ですね」

「否定はしないのかい？」

「ええ。自分でもそう思い当たる節がいくつかありますから。ごどもの頃からそう思ってきたんですよ。いい意見をもらえて嬉しいです。ええつと……名前まだきいてませんでしたね」

「梶原玲次。航空自衛隊の傘下にある対テロ対策部隊の情報作戦四課のペーペーさんだよ」

「じゃあこの事件解決したら給料あげてもらえるように上司に頼んだらどうです？」

「どうかなあ。あの人は人使い荒いから」

僕がははつと笑い、和美ちゃんにはこつとした。

「じゃあ欠けている人間はこの社会では生きていけないですね」

そう結論めいたものをいった。そろそろか。

「いや、そういうわけじゃ、」

「いえ、いいんですよ。私もつねづね考えていたことで梶原さんに言われなくても自覚、自認していたことなんです。あなたを招き入れて正解でした。最後の最後の結論が出てよかった」

「……………」

「これからこのビルしかけた爆薬、まあC4とかいろいろありますが、それをいつきに爆裂させます。地下にいるお仲間さんには悪いですが。それともさっきからスーツの下から狙ってる銃でこのキーを打つ前に私を撃ちますか？」

おつと。……普通にばれてるし。普通に腕組みしたつもりなんだけど。

「まあ、君見たいな可愛いこと心中もいいかもしれないけどそれに水を差すようでさらに悪いけど」

「なんですか？」

「君が始めに殺したといった彼氏は生きてるよ」

ワールドカードを出した。

「え？」

和美ちゃんが驚いたのは僕の台詞と自分の左腕にささった麻醉銃から発射された矢羽が突き刺さったことだろう。

そしてそのまま和美ちゃんは、力が抜けるように、

落下した。

フェンスの後ろに。

「ふう……………」

このためにここまで和美ちゃんの話に付き合い、スキをうかがってはいたけど、まさか武藤さんの助けをかりるとは。

「僕もまだまだだな」

そう呟きながらフェンスをおり、和美ちゃんに寄っていく。結構きついからもう寝ちゃって、

「……な、なんでいきているの……彼」
お。

「ん？ 凄いね。その麻酔撃ったらソツコーで効くんだけど」

ああ……、たしか彼女、肝臓が悪くて麻酔なれしてたか。でもそれでももって数分だろう。

「たしか……毒を。『カクテル』……」

「それはね。さっきいった人使い荒い上司さんが中和しちゃったみたいだよ」

それをきくとふーっと眠るようにまぶたを閉じた。

僕は少し躊躇いながら、彼女に近寄り和美ちゃんの耳元で囁く。

「君がさっき言ってた通りならナイフかなにかで彼氏をさしただろう。でも毒なんて、しかもあんな遅延性の毒を使う間接的な方法を選んだ。それってまだ君が彼を愛してる証拠じゃないかい？ もしかしたら、彼が異変に気づいて、

病院に行くことをどこかで祈っていた。

「僕はそう思うよ。」

と、言葉の途中で寝てしまったのかすっかりまぶたを閉じ、スーと寝息を立てている。

僕はまいったなと頭をかくと、

「最後のほうの言葉こそ、きいてほしかったんだけど……ん？」

和美ちゃんの目の端から水のように涙がこぼれた。

きいてくれたか……。と僕は苦笑すると、無線機をだした。

「梶原です。今終わりました。……はい。大丈夫です。……はいわかりました。あ、それから犯人からの要求ですが僕の給料上げることです」

そのまま反論を聞かずにぶちつと無線機を切った。

「は……やれやれ」

僕はフェンスに近寄りそれに背をあづけ、めったに吸わないタバ

コをだして火をつける。

「……僕は正しいことやったんすかねえ」
彼女は彼女の考えるべき世界が、姿あつた。それをとめた僕たちは……。

一気に煙を吸うと夕日にむかつてはきだす。

やっとふいてきたビル風に僕のタバコの煙がたなびいて、真つ赤に染まつた夕日に消えていった。

第一章 裁かれるもの 六

沈んでいく夕日から目を逸らし、手すりに背中を預けるようにして反対側の空に顔を移す。本当はこのまま床にでもねっころがりたい気分だけ。

少し下に視線をずらして眠ってしまった和美ちゃんをみる。一応はスーツの上着をかぶせてはいるが、なんだか死体を見るようで………所詮は偽善なんですかねえ」

そんなことを考えつつ、上着を回収して中に入ろうとして背中を手すりから離し、和美ちゃんに歩み

「……？」

僕が『目の前の屋上で一瞬光るもの』を刹那で目に入ってきて視認した瞬間、僕は屋上にある一番近い冷却ファンへ向かって思いっきり横っ飛びをしていた。

ほとんど反射だ。

次の瞬間に『僕のさっきそこまできた場所のコンクリートが空気音とともにはじけ』て、

僕がさらにローリングして冷却ファンの影に到達したときにはまたすぐそこにいた場所のコンクリートがはじけとび、

ターンっと音がした。

「くっそ！ マジかよ………！」

さらに遅れてターンっと音が響く。

「なんださっきのは！」

「わかりません！ 明らかに銃声ですがこのビル内ではありません」

「観測班とデータ解析班は現状報告、SIT、SAT、は空自と連携して全てこちらに情報回せ！」

ブリッジビルの地下駐車場二階の全フロア。そこに情報解析課の対策仮設本部がある。やれやれめんどくせえのがやっとなつた。たつたと武藤がのたまりながら撤収作業をしようとした矢先の出来事だった。

高く唸るような銃声に梶原の無線からの音。これでまるで温泉ムードだった雰囲気は戦場のそれに一気に逆戻りした。

「宮崎！ 屋上の観測からからの連絡は！」

武藤が各員に指示をだながら叫ぶ。

「いまくる。配備は五チーム。ここを中心に半径三キロはカバーしてる。……狙撃一班状況報告！」

宮崎がそういつと回りの動きが少し鈍る。現況を把握しておきたいというのは誰もが同じで早川含め全員が報告がくるスピー力を注視していた。

「南東一班より本部へ。こちらからではビルの陰になってなにもみえない」

くそつっつとって武藤がさらに指示を飛ばす。

「飛ばせるだけのへりを飛ばせ！ 府中から攻撃へりもひっばってこい！ ほらつとつと動け！」

少し酔ってんじゃないでしょうね、と思いつつ宮崎は武藤をじつとりとした目でみて次の報告を聞く。

「北西二班より本部へ。こちらネガティブ」

「北東三班より本部！ ビルより約四百メートル離れた建築中のビ

ル屋上に狙撃手発見。繰り返す狙撃手発見』

『こちら北四班、同じく』

『こちら南五班、状況は見えない』

つーまいった、と宮崎、武藤も嫌な顔をする。やれやれと不精髭をかきながらパイプ椅子に座りながらさめたコーヒを啜る。右往左往する課員をみながら、

「屋上狙撃かよ。まいったな……。しかも四百メートルからの狙撃とは随分と。三班、四班！ 狙撃手の相貌を報告」

しばらくの沈黙のあと、

『こちら三班、夕日のかげになり視認不可能。しかしおそらく子供と思われる。ライフルは長距離仕様の可能性』

「子供……？」

武藤が不思議そうに聞き返し、横にたっていた黒ずくめの柿崎が言う。

「仲間、ですね」

「やられたわね。作戦前にあらかたドブさらっておいたとおもったらこんなところに複線とは、ね」

そういいながら武藤の向かいに宮崎が座り、

「どつする？」

「冗談じゃないぞ……」

どう考えてもあれはライフル。しかも狙撃用だった。

本当にマグレとしかいいようがない。偶然にも和美ちゃんに歩み寄ろうとして、偶然に『敵の狙撃スコープに背中が反射してその存在に気づいた』のだから。

まったくもって反射でさけたのはいいけど、これじゃふくるのねずみだ。まさしく。

「どつしますかねえ」

そう自嘲気味に考えながら少し不思議に思う。

なぜ敵は、和美ちゃんが僕の手におちたときに狙撃しなかったのか。

それにスコープの反射で敵に気づかれる恐れがあるのが素人でも知っている基礎で、本当に撃とうというときにしかスコープは開かずには普通はそれまで双眼鏡で確認するのが常だ。

敵さんはただの本当に素人？ いや、素人があそこまで精密射撃ができるか。だったら。だったら可能性としては。

そこで僕の無線に強制的に割り込むチャンネル。無線の向こうから聞こえる通話音。僕はおもむろに腰からとって耳当てる。

「どうも。狙撃してる人かな？」

無言。とおもったら、次に少し壊れた笑い方の声が聞こえ、

「変な人だな君は。これから死ぬのかもしれないっていうのに」

……明らかに子供の声。しかも男の子か。

ちらりと和美ちゃんをみて、まったくと呟き、

「最近の子供がテロやるのがはやりなのか？」

そういいながら僕は内ポケットから百円ライターをとりだした。

「違うよ。これはただの余興というか、テロ以前の行動さ。今回は

カズミがその先陣をきってくれたけど、ちょっとあまかったね」

ふーん……。母音と子音に伸ばす癖。この子、外国人か。しかも

『南』の。

「余興、ね。それならなぜ仲間を助けなかった？」

『それは違う』

少し仲間と言う言葉にかなり反応する相手。

『僕達は手始めにこの平和ボケの国を出身者であるカズミたちが壊そうとした。僕達はそれに乗っただけだ。僕達の、』

そこで僕が横に百円ライターを放り投げる。

と、空中で爆散して弾丸で着火してコンクリートに火の膜を作る。しばらくしてまたターンっという銃声。

『目的はオーストラリアの独立の阻止だよ』

「……君、随分な腕前だな」

ありがとうと流暢な日本語であっちはいつてくるが。会話しながらライターを打ち抜くとは。この距離から離れて五十メートルでもコメ粒にしかみえないものはずなのに。

『カーペンタリア紛争のきっかけとなった、あの日本の海上自衛隊を巻き込んだトレス海峡事件。あのときから僕達は違う思想をもつてうごいてきた』

何の話がよくわからないけど、そうおもいながら、別ポケットにはいつている棒状の録音機器を無線にあて、チャンネルを本部に繋ぐ。

『梶原か！ 今どうなってやがる？ 敵さんはお前のところから約四百メートルのビルの屋上。子供らしい』

そりゃわかってますって武藤さん。

「動いてきた、ね。僕は逆に動けなくてピンチなんだけど」

そういうと武藤さんは黙る。こういうことには聡いひとだから助かると苦笑しながらまた無線に耳を傾ける。目の前の夕日がいい加減目に焼きつくように痛くなってきた。

『僕達は途中わかれてしまったけれどもいまでも一つ。あっちにもどればまた協力することもできるとおもう。そのまえにこのくだらない余興をそろそろ終わらせないとね』

ふーっと僕が溜息をつく。タバコをさぐって口にくわえたけどライターがなくなったことにきづいてさらに溜息をつく。

なにをいいいいのかよくわからないけど、少しおかしなことがある。

弾丸が届いて、それから銃声がした。

しかし、武藤さんは四百メートル離れた所に、と。

反対側からへりの音が聞こえてくる。

『レアナアはそんなもんじゃない。テロでもない。そろそろ終わらせよう』

第一章 裁かれるもの 七

へりの風を切るローター音は、このファンのむこう側、つまり狙撃の相手側のほうから聞徐々にこえてきた。しかしビル上空は完全に封鎖されていたはずなのにどうやってって、

「色々意味不明なこといつて逃げる気がよ……」

そう無線に呟いたけれども返事なし。

しかし、この近距離まで接近しないと気づかないっていうことは。単機？

おそらく消音ヘリか。輸送用、いや、ジェットのほうが。ファンの周りには暑い空気が停滞しているけど、そのへりの接近でどんどん向こうから冷気が流れ込んでくる。

さすがに消音と入っても数百メートルの範囲に近づかれればその存在感は直ぐに知れる。

いよいよこの近距離になってへりの出す下降気流、ダウンウォッシュと風きり音がかすかに聞こえ、バタバタとほこりやらなんやらが飛んできた。ファンの影になって見えないが狙撃手ぐらいはいるだろう。

「武藤さん、そっちのSITの狙撃は無理なんですか！」

とりあえず無線に叫んでみるが、……まあ、無理だから今にあーやって飛んでるんだらうけど。

『……わかって聞いてくるのならおめーが落として見せるよ』

はいはい……。しかし、なぜここで逃げなんだろうか。明らかにすでに僕を殺せるところまで来ていると言つのに、やらない。

理由は？

他の狙撃の仲間を見捨ててまで。

和美ちゃんを回収にきたのは共犯だとしてもこんなあつさり見捨て
るだろうか……。

「いや、違うか」

僕は脇につるしておいた麻醉銃をファンの横から銃身だけをそつ
とだす。

「……………」

何も無い。よし、やっぱりか。

僕は少し顔だして、へりを確認。僕のほうから北東にへりが音も
なく、建設途中のビル屋上に浮いている。へりの周りは電線が張り
巡らされていて、さらに警戒してるのか、サイドのスライドドアか
らガトリング装備の男が見える。

「なるほどありゃ無理だ」

なんとも納得しながら、そろそろ日没という太陽を目の前にして、
僕はファンのかけからでようとしたとき。

へりが急に方向転換。少し左に迂回しながら何の躊躇もなく僕の
いる屋上まで一瞬で来た。気がつけばへりが目の前で対空して、ど
つかの傭兵よろしく黒迷彩仕様の男が備え付けなのか、ガトリング
を僕に標準を定めていた。

完全ホールドアップ。

「……………ていうか海軍ですか」

くだらないことを考えながらへりの機種確認。

へりのダウンウオッシュを髪にうけて翻るワイシャツを気にしな
がらそのへりの全容を叩きこむ。最新式のジョットへり、確かまだ
実用段階に至ってないはずの『南』のイギリス軍が採用しているシ
ーホークというへり。

無音の風の中、へりは何をするでなくただそこにいるだけで、
僕はまた静かに無線を取り出して、言う。

「ここならどうにかならないすかね。武藤さん」

『めんどくせえからいわねえ。とりあえず投降指示でも言ってみろ』
それだったら別のへり部隊でもよこして追いかけてこしてくれ、

とげんなりしたけど一応仕事はしてみようか。というか航空支援が遅延しているのは一帯を封鎖しているから？

それを狙ってか……。

「おい！ そのこのへりの方々！ 今なら投降してくれば司法取引で見逃してあげることができるよー。どうかなー」

……不毛だ。かなり不毛だ。命狙われながら犯人説得なんて意味ないだろうが武藤さん。

しかし艦載機っていうことは東京湾か三浦半島沖辺りに船がいやがるな……。

海自に連絡を入れたいところだけど、確かほとんど南部海域へ出張ってる筈だから、海上保安庁か。期待できねえ。

と、急にへりからワイヤーロープが降りてきて一人の青年がするとSWAT顔負けの身のこなしで屋上に着地。和美ちゃんに近づくと、僕の上着を取り、よくよくみればなんともい로운な武器で武装している、陸戦用スーツをきらめかせながら僕のほうに悠然と歩いてきて、僕目の前で立ち止まり、スーツの上着を差し出した。

「なかなか楽しめたよ。僕達はこれでさようならする」

栗色の白人少年だけ目にはゴーグルで隠れて見えない。僕はなんでもなく上着を受け取ると、

「君、『南』の子だね？ もう一度聞くけどなんでこんなことするんだ？ テロをするならここにいる僕たち全員を殺してその和美ちゃんのあとを引き継いで実行するのが定石だろ？」

へりに三……四人。こっちは手持ちの麻醉銃に……、いや、反撃は無理か。狙撃チームに頼るしか……。

狙撃は今狙ってるのか……。それとも僕が障害になって撃てないのか。

栗色の髪の少年は僕の言葉にすこし嫌そうに笑い、

「驚いたね。やっぱりプロ同士はこうじゃなくちゃね。色々質問があるみたいだけど、あいにく時間が無い」

そういって左腕の腕時計を確認して、今度はいよいよ去るらしく

僕から離れて和美ちゃんを抱きあげる。

「『彼女達との約束はこれで終わり』だ。いい加減全員で行動しないといけないんでね。あとは説明をつけてくれ」

なんだかわからない台詞を残して彼は和美ちゃんをかかえたまま、ワイヤーのウインチで引き上げられながらそのままヘリに戻り、ヘリがいよいよ屋上から離れる。

「狙撃、観測全チーム！ 撃てるやつは撃て！ 撃て撃て撃てっ！」
僕は無線にそう叫ぶが誰からの支援もない。　なんだ？　どういうことだ。

僕はそのまま手すりに走りよって去っていくヘリのローターを麻酔銃で狙うが、

「くそ！」

『そこは三班だけが視認できるが反撃される可能性がある、無理だ』
武藤さんの声を聞きながら、僕は去って、夕日に照らされ、途中で消えるようにいくジェットヘリを見送る。

「さっきのイギリスの最新式のシーホークですよ。どこかの湾岸に艦載機の船があるはずですよ」

『わかってるよ。今警察庁と連絡とって早川に探させてるよ』
すかつ、とって僕は手すりから離れる。

なんだかおかしい。

あつさりしすぎている。

なぜ僕たちを殺さなかったのか？　顔を見られたんだっただら、いや、違う。彼は説明を受けるとかなんとか。

そうだ。武藤さんの敵は約四百メートルに、それに、

銃弾が先。音が後。

と、一瞬、左足がガクンっと落ちた。

なにがおきたかわからなく、膝をついた左足太ももをみると、撃たれた銃創があり、血がじんわりとスラックスに滲んで、

「くっそつたれ！」

痛みあまりその場に僕は思いつきり転がりながら仰向けに倒れた。少しでも狙撃を避けるために。

そしてターンっという銃声。

「やっぱり、いたんじゃないか、よ、くそっ……」

計算狂いどころか、全員が騙された。

距離四百からの狙撃じゃ銃声と音はほぼ同時のはずだ。

音が後からくるならば弾丸が音速を超える前提が必要。ならば、最低一キロ以上離れていなければ銃声は遅れて聞こえない。

和美ちゃん自体が複線。ミスリード。

「武藤さん！どこからですか！こっちのフォローは！」

『こちら観測三班、狙撃はここから二キロ以上離れた同程度の位置から発射された模様』

『宮崎よ！もう一機へりが高速接近中！早くそこから離れて！』

後ろに伏兵。初歩じゃないか。どうにもならない。この状態で屋上入り口まで行けそうにないし、そもそも『彼が僕たちを見逃したのは僕たちを全員殺すため』だ。起き上がったとたんに撃たれる。

彼はフェイクだった。撃っていたのはもっと後ろの長距離のところからの、

「こいつらね……」

僕の足元の方向にさつきと同じ消音のシーホークが滞空していた。しかし今度は長い黒髪を持った、ワンピースにキャミソールの私服姿のどこにでもいそうな少女がごつい狙撃銃を僕に狙点をヘリのサイドから定めていた。ていうか、くそ、いつて……。

「あなたが、和美をやったのね？」

第一章 裁かれるもの 八

消音どころか、まったく音がないうへりのおかげで彼女の静かな声ははっきり聞こえる。彼女の声は上ずってもいなく、怒気も孕んでいないただの音の連なりで、綺麗だと思えた。彼女どこか日本人離れしていなく、それでいてその無表情は普通のただの少女にしか見えなかった。

「……そうだよ」

僕はワイシャツの袖を腰のナイフを振り抜き、切り出し、横に転がってる細い鉄骨を視点に太ももに止血帯ささと巻く。

そして、……こんなことだれが進んでやるか、自分の左足の膝に麻酔銃をつけ、撃った。

「ぐうぐうぐうっ！ ……つくつそが……」

すこし痛みに悶えてると上から『説明役』の彼女が関心したように、もしくは呆れたかのように声を出す。

「随分と……度胸あるのね。軍隊の方。さてと、しかし ここまで面白いようにひっかかってくれるとやる気も失せるわ。それとも馬鹿なのか阿呆なのか」

どうやら今度は日本人らしい女性の声に激痛を堪えながらなんとか皮肉気にやける。

「ありがとう……さん。まさか…… 『後ろに』 ……もう一人いるとは思わなくてね」

彼女は夕日に目を移すと、肌理の細かい髪を掻きあげる。長い髪がへりの下降気流に弄ばれ、綺麗な顔に似合い、ますます銃が不釣合いにみえた。

「えっと、さつさと言っちゃうけど。あ、これちゃんと中央の偉い人に届いてるわよね？ 私達は例のトイス海峡事件で被害者となった海自の遺族の子供たちよ。まあ、馬鹿なあなた達でもそのうち辿りつくでしょうけれど。あとさつさのレアノア、というのは、そうね、まああたしたちの集団の名称みたいなものよ」

彼女が銃を膝までさげる。僕は麻酔が効いてきて麻痺し始めた左足を立て膝にした。

「トレス海峡事件をやむやにした日本政府のせいでわたしたちは残され、そしてあの紛争までに発展した。現在の南の独立は日本が根源に原因があるってわかるでしょ？」

僕は片手について半身を起こす。

「そうだね……。昔の政治家は保身だけ考えてたから。調査も列強から弱腰って見られたくなくてあんな結果になった。でもあそこでの政治的取引がなかったら今頃日本は、」

「戦争になつてた？」

「……………」

彼女は少し笑いながら言う。

「なればよかったのよ。何の罪もないものが罪を受け、そして戦争の必要のないところで戦争が起きる。理不尽っていうものが世界を壊すっていうことをまったく知らない無自覚な悪意。当事者がそんな平和ボケてるのなら私達が正してあげる、私達が、和美と私はそう考えて日本にきたの。でもレアノアの中でそう考えていたのはわたしたち二人だけ」

「……………」

ふー……。狙撃チームは全員狙ってるはずだ。無線は………多分大丈夫。

僕はすっかり暗くなってきた空に目を移して、流れている筋雲しつかり見て目を細くして。

片目だけを瞑る。

「だから、彼には無理言って手伝いに来てもらったの。彼は日本と

いう国をどうでもよく思ってるらしいから。もつと言うとレアノアは一つで一纏まりじゃない。それぞれの思想を持って戦争を起こして、必要なところには戦争を潰すっていう感じ。そこらへんにいる過激派とかテロリストだとかとは、違うのね。まあ、もちろん平和的解決を、望んでいる、人もいるけどね」

……ん？ なんだろう。なんか悲しげに似たような……。

「随分な考えをお持ちだな。神様になったつもりかい？」

僕が笑いながら言っただけでポケットに手を入れてなんでもないように出す。

「キリストなんてどこにでもいるわ。あなたにも、私にも。正義は、誰にでもある。判断をするのは世界であり、民衆であって、世論の歴史よ。さて、」

そう言っただけで狙撃銃、おそらくVRS10を僕にむける。その重そうな鉄の塊を軽々と持ち上げ、無表情に、

「えっと、そろそろ終わらせましょうか。下の人にも今狙ってる狙撃の方々にも悪いけど、」

「確かに悪いね」

僕が台詞に割り込んで、左手に握っていたものをへりに向かって無造作に投げる。

彼女は反応は出来ただろう。

でもこの「不意打ち」は予測できないと僕は、そう踏んだ。

「　　っ！」

彼女は打ち落とそうとすばやくほぼ反射で反応するが、遅い。

スタングレネード。

小型のハンドサイズの発煙閃光手榴弾は空中でピンが抜けると、少しの破裂音と同時、屋上近辺を真昼にした。

僕は『ずっと瞑っていた片目を開けて』、彼女たちがすっかり視界を失っていることを確認して。

「三班！ 四班！ できるなら全チーム全ての弾をへりに打ち込め！」

そう無線に叫ぶとあっちも予想していたのか、

いくつもの銃弾の風切り音。無線の怒号と弾ける石の音と金属音が光だけ晴れ、まだ煙の残る中、いくつも聞こえて、

「ハリアーだ！ ハリアーが来たぞ全員撤退！ そんなもの置いてけ」

「こちら一班、東京湾方角から戦闘機が来たぞ！」

「交戦中止！ 中止！」

「マツジかよ、きいてねえ……」

戦闘機まで……。バックにはなにかどっかのパトロンがいるな絶対こりゃ……。。

SITの無線を聞いて、目の前の煙が晴れると、

「今日は帰れるのかなあ……」

ただの日没後のにごった東京の空だけしかなかった。

第二章 救われるもの 一

新筑波国際空港搭乗ターミナル。液状化現象で半分沈んでしまった新東京国際空港の代替として作られたもので、ここは国内二番目の国内外の人が行きかうゲートとなっていた。鬼怒川沿い、つくば学園都市沿いともあつて外国の観光客が耐えない場所でもある。

その入国審査ゲート九番。今に他のその他大勢の人と同じく日本に入国しようとしている少年がいた。

長身で一七〇センチ後半。しかし顔はまだ幼く、実際の実年齢は一七歳といわれてもそう信じられる者いまいだろう。たしかにその大人びた顔立ちには大学生のような雰囲気がある。髪は日本人特有の黒色に日本人の特有の黄色人種。季節にそつた半ズボンにTシャツ、そしてアウトドア帽子にリュックとこれからハイキングにでも行くのかというような出で立ちだが。

対面する入国審査官にはつきりと答えていく。

「Are you the British? Is a hom
etown Manchester?」

(あなたはイギリス人? 出身はマンチェスターですか?)

彼の後ろに控えるまだ三十人以上の入国者を上目遣いでみてその二十代女性の審査官は少しため息をつきながら五つの書類にハンコを機械的に押しつけて、横のパスポートを確認する。

「Yes. My father was British th
ird generation Japanese Americ
an, and I moved to Australia w
ith the family by a relation o
f father's work at five years

oid」

(はい。私の父がイギリスの日系三世で、私が五歳の時に父の仕事の関係でオーストラリアに家族で移住しました。)

少年はまるで軍隊の上官に報告するような言い方で無表情で答える。審査官はその様子をみてふん、つと両眉をあげて笑い、

「Have you come from Richmond with that? A purpose of entry to Japan?」

(それでリッチモンドから来たんですね? 日本への入国目的は?)

「It's sightseeing. I have the friend who was studying abroad here and have come to play. I met by a club called rarenion at school」

(観光です。こちらに留学していた友人がいて遊びにきました。学校のレアノアというサークルで知り合っただんです。)

「reunion? Is it French?」

(『集合』? フランス語ですか?)

少し興味を持った風な審査官に少しはじめて眉顰め、表情らしいものをだした少年はいう。

「No. It's an ordinary club name」

(いえ。ただのサークル名です。)

そうですか、と審査官が呟き、パスポートにライティング気味に入国許可のハンコをおす。

「The length of stay?」

(滞在期間は?)

少年はにっこりしてリュックを少ししよいなおして答える。

「Three weeks」

(三週間です。)

審査官は少年の笑顔に答えるように笑顔になりパスポートをわたしながら言う。

「I see . A good vacation . Mr Tomoyuki . Please have the next person!」

(わかりました。よい休暇を。智之さん。次の人どうぞ!)

「ありがとう」

少したどたどしい日本語で礼をいうと、パスポートをもって、さつそくとばかりに荷物受け取り口にむかう少年。そのあとをわき目でみて、女性審査官はほくそえみながら次の外国人の対応をしようとパソコンの画面を変えようとしていると、

「ん?」

女性審査官は疑問の声を上げる。目の前のアングロ系の外人を無視してパソコンの操作をする。先ほどの少年、智之という日系イギリス人の個人社会保障番号が通らない。なんとIDを通して「不許可」の赤文字があがる。

……まさか。

横の電話をとると、その場からはなれまだ背中が見える少年のあとを早歩きで追いながら、

「こちら九番ゲートで問題発生。イギリスのオーストからきた一七歳少年が偽造パスポートで入国の疑いあります。警備員を四人まわしてください」

そう早口で言うつと、もう目の前の少年の背中に叫ぶ。

「Stop! You stop immediately, and please raise your both hands!」

(止まりなさい! 君、すぐに止まって、両手を上げて!)

審査官は息を切らせながら追いついて、警棒をだす。少年、智之は言われたとおりとその場でピタリととまり、静かに両手をあげる。

周りの観光客、搭乗客はなにごとかと周りを円状に十メートル以上離れて見ては、暫くしてやってきた警備員に押されている。

智之の後ろに女性審査官一人、左右にごつい警備員が先端が電気シヨックを与える警防を持ったまま控え、正面に一人。

それを両手を上げながらしずかに一人一人確認していくように首をめぐらせ、そして最後に女性審査官に落ち着く。

「なにか問題でもありましたか？」

流暢な日本語。その質問に一瞬審査官は戸惑ったが、

「あなたに不法入国の疑いがあります。近年はオーストからの不法入国とテロがありますのでオーストからきたあなたにはこちらのオフィスに来ていただき重要な質問を受けていただきます」

智之の周囲の警備員が静かに近寄る。

「きちんと丁寧な対応は約束します。ですから抵抗はしないでく、」

「そりゃ無理だ」

そう智之がいた途端、女性審査官の右の警備員が二メートルほどふっとんでいた。智之のその突然の行動に全員がまだ残身している格好をみる。

右手を腰に、左手を肘をはって拳を顔につけて、両足は大きく開いている。そして今度は左の警備員に一足飛びで襲い掛かる。

まさに疾風。反応する時間がまるでない。

警備員はかろうじて警棒を振り下ろすが右手右足をだす体捌きでかわし、その警棒をもった手首を少しひねあげ、警棒を奪い、腕を取って自分の頭を一蹴させて後ろ向きになり反動で投げる。一回転した警備員に空中でつきをくらたわせたあとに、今度は正面の警備員には一瞬でけりがついた。

つかみ掛かると、明らかに柔道の天中落として極めた。

そして女性審査官に向き直る。その時間まさに二十秒となかった。

呆然としている目の前の女性に智之は言う。

「悪いですね。捕まるわけにはいかないのです」

「あ、あなたなんなの？ なんで……」

ん？ と智之が首を傾げて、ああ、納得したようにいった。

「最初のは小林拳、次に合気、そして次に柔道ですよ。あなた達が警備のプロなら、僕は格闘のプロフェッショナルです」

随分と見当違いな答えで、それだけいうと智之はしずかに歩いて縦断爆撃された後のように静まり返ったターミナルをリュックを揺すりながら走り去って人ごみ紛れていった。

「……………」

あとにはまだ入国手続きを済ませていないいらだつた外来人と沈黙と疑問符をいくつもつけた野次馬と女性審査官、そして一瞬でのされた三人の警備員だけが残された。

「ありやなんのカンフーアクションだ？」

さらに見当はずれな感想を野次馬の一人が言う。

「梶原君は？」

白衣を着て、そしてデスクチェアにふんぞり返る、女性が言う。

連日の激務と苦情処理で徹夜しているということが分かった。

「宮崎よう。俺が知るわけねえだろう。それよりもその山のような報告書かたせ」

そう言つてそのオフィスの長、武藤がのたまる。

宮崎はふーんと天井を見ながら言つて、

「大事にはならなきゃいいけどねえ」

そういつてかんでいたフーセンガムを膨らます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2763v/>

風の中から夢の中へ

2011年9月25日03時28分発行